

『枕草子』 「もの」型章段の文章構造

藤原浩史

1. はじめに

『枕草子』は、日記的章段、随想的章段、類聚的章段の3種の混合体である¹⁾。この中で類聚的章段は、特異な構造をもつ。「もの」型章段は、一見事物の羅列であるが、論理的な線状性をもつ構成体である。

具体的な事物を指示する名詞句が、抽象的な概念を形成する手段、概念と概念を統合する命題を形成する方法について論考してきたが、それが成立するためには、一連の章段に一定の読解方法があらかじめ設定されていなければならない。

たとえば、「もの」型章段は、基本的に冒頭に章段主題²⁾を呈示し、以下名詞述語が並ぶ様式で構成される。散文でありながら定型的である。本稿は、その定型性を記述するものである。藤原(2018)において、「もの」型章段の読解が著者のモノログではなく、著者と読者のダイアログを構成することを主張したが、それはこのテキストが要求する環境の問題である。本稿では、テキスト内部の問題、すなわち文章構成の様式的な実態を明らかにすることを目的とする。

『枕草子』の「もの」型章段が、どのような文章構成をとるのか、文単位で調査し、その特徴を明らかにする。調査資料には、新編日本古典全集を用い、冒頭に「もの」型の章段主題をとる78章段について調査した。

調査結果は、論文末尾の【表1】の通りである³⁾。

文の述語タイプにより、以下の通り、分類をほどこした。

- | | |
|--------------|-------------------------------------|
| ◎ 章段主題 | : 章段冒頭の名詞句。 |
| ○ 名詞述語文 | : 名詞を述語とする文。 |
| ● 名詞句述語文 | : 名詞句（用言の連体形）を述語とする文。 |
| ◇ 「なり」型名詞述語文 | : 文末に「なり」を付加する名詞述語文 ⁴⁾ 。 |
| △ 形容詞述語文 | : 形容詞・形容動詞を述語とする文。 |
| ▲ 省略型形容詞述語文 | : 述語の形容詞・形容動詞が省略されている文。 |
| □ 動詞述語文 | : 動詞を述語とする文。 |

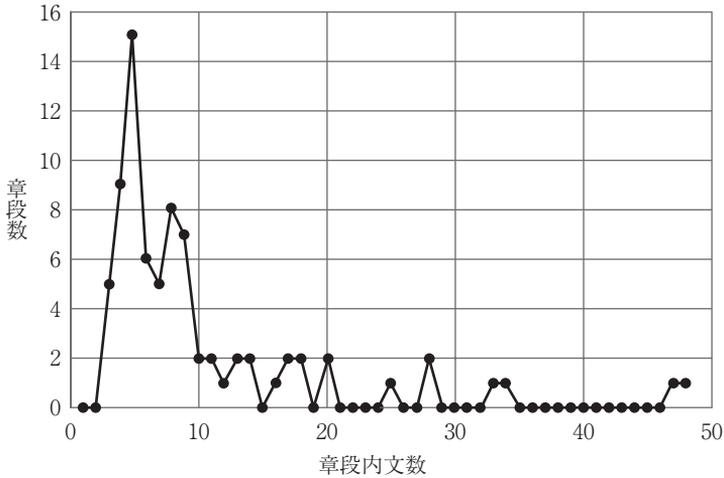
○名詞述語文および●名詞句述語文は、文末に助動詞「なり」をとともわないタイプのものであり、◇「なり」型名詞述語文と区別する。

用例の引用にあたっては、文ごとに分かち、アルファベットで文番号を付与する。また、文のタイプの表示を上記記号によって行う。なお、章段番号は、新編日本古典全集に従う。

2. 「もの」型章段の文数

「もの」型の78章段に含まれる文の数は、797文である。平均すると、1章段あたり10.2文となる。ただし、3文（最小値）からなる章段から、47文（最大値）からなる「にくきもの」と結構長い章段までである。実態を示すと、【図1】となる。

【図1】 章段の文数



5文で構成される章段が15ともっとも多く（代表値）ピークをつくるが、8文・9文のところにもピークが見られる。順位上位は以下の通りである。中央値は6文のところに来るが、これはこの2つのピークの間である。

- ① 5文 15章段
- ② 4文 9章段
- ③ 8文 8章段
- ④ 9文 7章段
- ⑤ 6文 6章段

短い4～5文タイプの章段は次の(1)のような構成になる。第1文はかならず章段主題であるから、章段主題に対して、3～4文をつけるタイプである。

- (1) a ◎ つれづれなるもの
 b ○ 所さりたる物忌。
 c ○ 馬おりぬ双六。
 d ○ 除目に司得ぬ人、家。
 e △ 雨うち降りたるは、まいていみじうつれづれなり。

(133段 つれづれなるもの)

aの章段主題(◎)につづいて、それを主語とする名詞述語文(○)がb～dに3連鎖する。そして、末尾eに形容詞述語文(△)をおいて章段をまとめる。この章段では「つれづれ」という心的状況が、個人が活動できる場がないことを提示している。

8～9文タイプは次の(2)のような構成である。章段主題につづいて、名詞述語文(○)と名詞句述語文(●)がb～dに3連鎖する。そして、eに形容詞述語文(△)をおき、筆者のコメントをつける。ここを区切りとして、f～hに名詞句述語文が3連鎖する。そして、末尾のiに形容詞述語文をおき、やはり筆者のコメントで章段をまとめる⁵⁾。

- (2) a ◎ かたはらいたきもの
 b ○ まらうどなどに会ひて物言ふに、奥の方にうちとけごとなど言ふを、えは制せで聞く心地。
 c ● 思ふ人のいたく酔ひて同じ事したる。
 d ● 聞きゐたりけるを知らで、人の上言ひたる。
 e △ それは何ばかりならねど、使ふ人などだに、いとかたはらいたし。
 f ● 旅立ちたる所にて、下衆どものざれゐたる。
 g ● にくげなるちごを、おのが心地のかなしきままに、うつくしみ、かなしがり、これが声のままに、言ひたる事など語りたる。

- h ● 才ある人の前にて、才なき人の、物おほえ声に、人の名など言ひたる。
- i △ ことによしともおほえぬわが歌を人に語りて、人のほめなどしたるよし言ふも、かたはらいたし。

(92段 かたはらいたきもの)

前半の連鎖では知らないで不都合なことが生ずるタイプを提示し、後半の連鎖では場をわきまえないで生ずる不都合を提示する。つまり、8～9文タイプは、4～5文タイプのユニットを2つ組み合わせた構成と見なすことができる。

これを【図1】で確認すると、「もの」型章段の約半数は、このユニット1つからなっていると見なされる。そして、4分の1は、このユニット2つからなる。そして、3段構成、4段構成、5段構成と展開すると、長いタイプの章段となる。

(1)(2)の例で明かなように、「もの」型章段では、文と文をつなぐ接続的な要素や指示語が少ない。しかし、文タイプが意図的に選択されており、読解に手順が与えられる。基本となるのは、名詞述語文・名詞句述語文の連鎖であり、このまとまりが基本単位を構成し、なんらかの命題を構成する。そして、それ以外の例えば形容詞述語文は、その連鎖に対する区切りとして機能するよう見える。

たとえば、(1)におけるeの「いとつれづれなり」、(2)におけるeの「いとかたはらいたし」、iの「かたはらいたし」のように、章段主題に提示される形容詞を述語として反復するものがあるが、この文タイプを選択することで、そのように感じる判断主体の存在が文内に生ずる。この文脈で「そのように思う」のは筆者に他ならず、筆者に固有の情報であることが示される。逆に言うと、そうではない名詞述語文は、筆者の固有情報ではないことになるので、筆者と読者に共有される情報という価値を与えられることになる。

主語名詞と述語名詞からなる名詞述語文は、「ほく（は）、うなぎ（だ）」のように、会話が行われる場と、文脈に依存して意味が確定するタイプの文である。「もの」型章段はきわめて短いタイプの文章であるから、ほとんど文脈というものはない。そうすると、場に依存していなければならない。これを読む前提として、清少納言は一定の場を設定しているはずである。このテキストがおかれる場については、藤原（2018）において、筆者と読者による対話的な構造があらかじめ予定してあることを明らかにしているが、このような文タイプ選択による定型性によって「もの」型章段の対話的構造が構成されているのである。

3. 「もの」型章段の文の述語タイプ

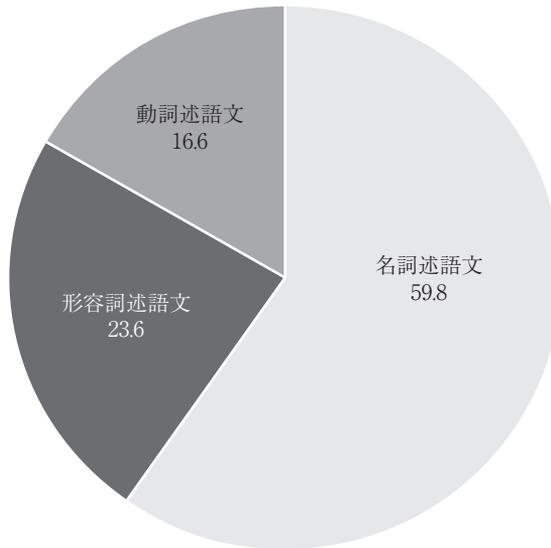
「もの」型章段の文タイプの比率を【表1】からまとめると、次の【表2】となる。述語部分に着眼するので、章段主題78をとりのぞいて、全部で719文である。

【表2】「もの」型章段の文の述語タイプ

	名詞述語文			形容詞述語文		動詞	計
	名詞	名詞句	なり型	形容詞	省略型	述語文	
	○	●	◇	△	▲	□	
文数	256	160	14	163	7	119	719
	430			170		119	
%	59.8%			23.6%		16.6%	100%

大きく、名詞述語文、形容詞述語文、動詞述語文にまとめて表示すると、【図2】のようになる。名詞述語文のタイプが約60%となり、文体基調を形成していることがわかる。これは、前掲(1)(2)のようなスタイルであり、「もの」型章段が名詞句を羅列することを投影している。

【図2】 「もの」型章段の文タイプ構成（数字：％）



『枕草子』の日記的章段や随想的章段においては、このような名詞述語文の卓越は見られない。たとえば(3)では、過去の事実を叙述するものであるが、1文が長く、しかも、動詞述語（下線部）の連鎖によって文章が形成されている。

- (3) 「無名といふ琵琶の御琴を、上の持てわたらせたまへるに、見などして、かき鳴らしなどす」と言へば、弾くにはあらで、緒などを手まさぐりにして、「これが名よ、いかにとか」と聞えさするに、「ただいとはかなく、名もなし」とのたまはせたるは、なほいとめでたしとこそおほえしか。

(89段 無名といふ琵琶)

また、類聚的章段の「は」型章段は、次の(4)のように章段冒頭に a・b の

ように名詞述語文を連鎖するところは、「もの」型章段と類似する。しかし、自らの評価を述べる c・d には形容詞述語文 (△) が連鎖し、具体的な論評を行う e 以下には動詞述語文 (□) が連鎖する。

- (4) a ○ 木の花は 濃きも薄きも、紅梅。
b ● 桜は、花びら大きに、葉の色濃きが、枝ほそくて咲きたる。
c △ 藤の花は、しなひ長く、色濃く咲きたる、いとめでたし。
d △ 四月のつごもり、五月のついたちのころほひ、橘の葉の濃く青きに、花のいと白う咲きたるが、雨うち降りたるつとめてなどは、世になう心あるさまにをかし。
e □ 花の中より黄金の玉かと見えて、いみじうあざやかに見えたるなど、朝露に濡れたるあさぼらけの桜におとらず。
f □ 郭公のよすがとさへ思へばにや、なほさらに言ふべうもあらず。
g □ 梨の花、世にすさまじきものにして、近うもてなさず、はかなき文つけなどだにせず。
h □ 愛敬おくれたる人の顔などを見ては、たとひに言ふも、げに葉の色よりはじめてあはひなく見ゆるを、唐土には限りなき物にて、文にも作る。
i □ なほさりともしやうあらむと、せめて見れば、花びらの端にをかしきにほひこそ、心もとなうつきためれ。〈以下略〉

(35 段 木の花は)

文章というものは、線状性を特徴とするが、たとえば動詞述語を連鎖する場合には、(3)のように時間的な線状性に基づく。起こったことを順番に語るわけである。(4)では時間的な推移はないが、「木の花」について思うところを形容詞述語や動詞述語の文によって叙述している。これは、筆者の心理的な線状性に基づいている⁶⁾。

「もの」型章段では、このような形容詞述語文や動詞述語文が少ないが、それは時間的な線状性や心理的な線状性に基づく文脈ではないことを意味する。文章の流れが読み取りにくいのはそのためでもある。しかしながら、線状性のない文章というものは文章として存在理由がないので、なんらかの線状性とまとまりを有しているはずである。

個々の名詞述語文は、単なる具体的な事例ではなく、抽象的な命題を表現するために選択されていることは、藤原（2017）によって明らかにしているところであるが、その命題の連鎖によって成立するものは論理である。すなわち、「もの」型章段の基本構造を形成するのは論理的な線状性であると考えられる。

4. 文の述語タイプの出現状況

「もの」型章段が名詞述語文の連鎖を根幹とすることは、集計すると明らかになる。まず、1つの章段に含まれている各文タイプの数进行カウントする（文数）。そして、その文数で構成される章段をカウントする（章段数）。両者をまとめると次の【表3】となる。

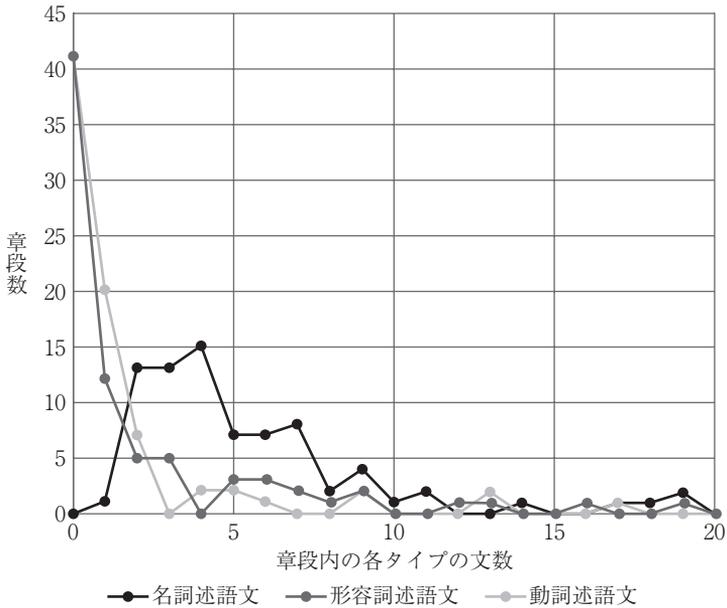
【表3】において、名詞述語文が他と区別される特徴は、全78章段の中で、名詞述語文が現れない「文数0」の章段がひとつもないところである。名詞述語文は、各章段に少なくとも1文はあり、ほとんどの章段は2～7文の名詞述語文を含んでいる。すなわち、これは「もの」型章段の必須要素である。これに対し、形容詞述語文、動詞述語文は「文数0」、すなわちそれらを含まない章段がそれぞれ41章段（各52.6%）ある。また、これらを用いる場合も、1～2文の場合が多い。こちらは「もの」型章段において必須の要素ではないことがわかる。

【表3】 文タイプの出現状況

名詞述語文		形容詞述語文		動詞述語文	
文数	章段数	文数	章段数	文数	章段数
0	0	0	41	0	41
1	1	1	12	1	20
2	13	2	5	2	7
3	13	3	5	3	0
4	15	4	0	4	2
5	7	5	3	5	2
6	7	6	3	6	1
7	8	7	2	7	0
8	2	8	1	8	0
9	4	9	2	9	2
10	1	10	0	10	0
11	2	11	0	11	0
12	0	12	1	12	0
13	0	13	1	13	2
14	1	14	0	14	0
15	0	15	0	15	0
16	0	16	1	16	0
17	1	17	0	17	1
18	1	18	0	18	0
19	2	19	1	19	0
20	0	20	0	20	0

【表3】をグラフ化したものが【図3】である。【図3】で確認できるように、名詞述語文は中心のある山型の分布となるが、形容詞述語文と動詞述語文はともに極端なL字となる。この両者は、章段の文章構成に果たす役割が、異なることが示される。

【図3】 文タイプの出現状況



名詞述語文が最少の1であり、形容詞述語文2とともに構成される章段が、次の(5)である。(5)における、b・dの形容詞述語文とcの名詞述語文の違いはなにか。

- (5) a ◎ 言ひにくきもの
 b △ 人の消息のなかに、よき人の仰言などのおほかるを、はじめより奥まで、言ひにくし。
 c ○ はづかしき人の、物などおこせたる返事。
 d △ 大人になりたる子の、思はずなる事を聞くに、前にては言ひにくし。

(106段 言ひにくきもの)

cの名詞述語文は、「a言ひにくきもの—cはづかしき人の物などおこせたる返事」のように章段主題と名詞述語が呼応する。一方、b・dは述語に「言ひにくし」をとるが、これを述語とするからには、この文の主語は章段主題の「言ひにくきもの」ではありえない。主語になりうる、そのひとつは、「言ひにくし」すなわち、ひとに説明することに躊躇を感じる、その感覚主体である「わたし」あるいは不特定の「みんな」である。そして、もうひとつ、「言ひにくし」の評価対象であるb「よき人の仰言～」・d「思はずなる事」である。どちらにしろ、章段主題を主語にとらない文を形成する。もしも、この後者だけを指摘したいのであれば、これを章段主題に対する名詞述語にすればいいはずである。あえて章段主題と重複する形容詞述語を付与するのは、前者の存在を卓立することを目的としている。

cの「立派な方から贈り物を頂いたときの御礼」を言うのは、たしかに気をつかう。これは誰もがそう思うだろう。清少納言は、自分だけでなく読者も共有している情報としてこの文を提示している。形容詞述語文を選択するということは、そうではないことを意味する。共有を前提としないということは、清少納言に固有であることを前提とする。b・dの感覚主体には、一人称の場合と一般論の場合があるが、「もの」型章段においては後者はありえないのである。つまり、形容詞述語文は、文章様式上、清少納言の固有情報であると意味づけられる⁷⁾。

動詞述語文の場合も同様である。(6)はb～hに、章段主題を主語とする名詞述語文がならぶ。対極的な事例を並べることで、自然や社会における連続的な現象に対して、ひとが両極をもつ評価尺度を設定していることを指摘する。

- (6) a ◎ たとしへなきもの
b ○ 夏と冬と。
c ○ 夜と昼と。

- d ○ 雨降る日と照る日と。
- e ● 人の笑ふと腹立つと。
- f ● 老いたると若きと。
- g ● 白きと黒きと。
- h ○ 思ふ人にくむ人と。
- i □ 同じ人ながらも、心ざしあるをりとかはりたるをりは、まことにこと人とぞおぼゆる。〈下略〉

(69段 たとしへなきもの)

そして、それは目に見える現象だけでなく、**h**「思ふ人にくむ人と」のようにその人の心の中にも存在することを提示して、ひとがあらゆるものに評価の尺度を設定することを述べるものである。それにつづけて**i**では同じ人について、自分に愛情があるときとなくなったときをあげて「別人と感じる」と述べる。**h**の理解として、ひとによって感情が異なることは自然だと思つて読者も想定される。そのため、同一人物を対象とする評価に固定することで、反論を抑止するのである。その判断主体は読者ではなく清少納言である。ここで、「おぼゆる」ことを動詞述語文で表現することで、章段の中でこの部分は清少納言個人の意見であることを卓立するのである。

形容詞述語文や動詞述語文は、「もの」型章段の必須要素ではないものの、それを組み込むことで、清少納言に固有の情報であることを表示する。すなわち、「もの」型章段の中には、清少納言と読者が共有していることを前提として語られる名詞述語文と、清少納言に固有であることを前提とする形容詞述語文と動詞述語文という、2つの叙述態度があるわけである。

5. 章段の長さと言文タイプ

名詞述語文は「もの」型章段の基本構造を形成する。形容詞述語文と動詞述語文はそれに付随して現れ、清少納言個人の見解を付与するものである。「もの」型章段は、3文構成から47文構成にいたるものまで章段のサイズが大きく異なる。2つの叙述態度が均等に現れるわけではない。

78章段をサイズによって、次の4つに分類し、文タイプの構成を調べる。概ね、章段数が均等になるように4分する。文の数に章段主題は含まない。

- A 2～3文で構成される、短い14章段
- B 4～6文で構成される、やや短い26章段
- C 7～10文で構成される、やや長い19章段
- D 11文以上で構成される、長い19章段

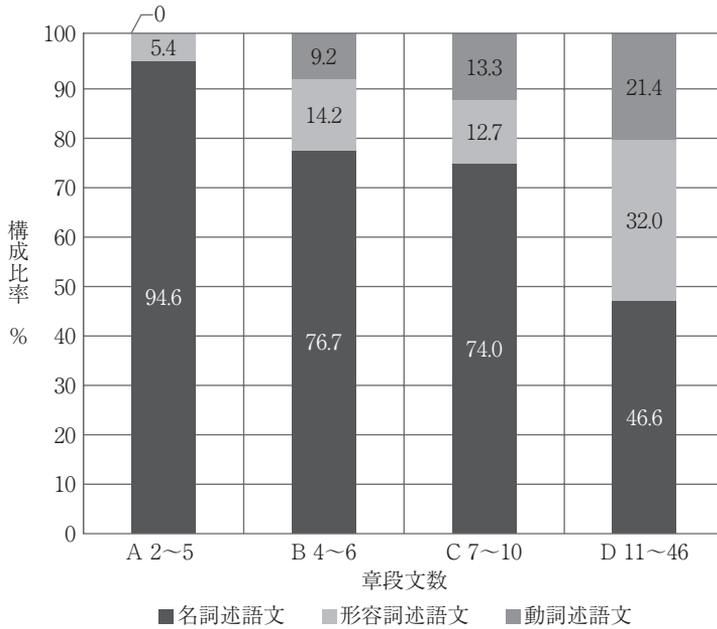
集計結果は【表4】であり、文タイプの構成比率を表示したものが【図4】である。

【表4】 章段の長さと言文タイプ

文数	章段数	名詞述語文	形容詞述語文	動詞述語文	計	
A	2～3	14	35	2	0	37
B	4～6	26	92	17	11	120
C	7～10	19	111	19	20	150
D	11～46	19	192	132	88	412
計		430	170	119	719	

もっとも短いAグループでは、章段はほぼ名詞述語文のみで構成される。そこでは、名詞述語文の連鎖によって、1つの命題が提示される。たと

【図4】 章段の長さと言文タイプ



例えば、(7)において「はるかなるもの」として、まず男性貴族が半臂につけて袍の下に垂らす忘れ緒を整えることを提示する。それ自体には距離感を感じられないので、疑問が生ずるところである。

- (7) a ◎ はるかなるもの
 b ● 半臂の緒ひねる。
 c ○ 陸奥の国へ行く人、逢坂越ゆるほど。
 d ○ 生まれたるちごの、大人になるほど。

(103段 はるかなるもの)

しかし、cにおいて日本の最果てである陸奥に赴任する場合をとりたて、長い道中のほぼ出発点である逢坂を指示する。物理的な距離としては最短に近いが、前途を考えることで空間的な距離感が最大となる。dにおいて生まれたばかりの赤ちゃんに着目して、成人するまでを考えると時間的な距離感が最大となることを示す。これによって、bは女性の視点から見て、一緒にいる男性が出勤の支度をはじめのポイントであり、社会的な距離感をもっとも感じる時であるとわかる。そして、社会的、物理的、時間的な距離感というものは、到達点や経過よりも出発点において心の中で最大であると帰結できるのである。章段主題の「はるかなるもの」というのは、物理的な距離についての評価であるが、その基準はむしろ心理的であることを主張するものである。このように名詞述語文の連鎖によって、具体的事例を重ね合わせてひとつの抽象的な命題を形成するのである⁸⁾。

4～6文からなる、やや短いBグループも同様であるが、形容詞述語文と動詞述語文がはいりやすくなる。たとえば(8)では、言語がb法師、c男性貴族、d女性貴族で異なることを指摘するものである。

(8) a ◎ 同じことなれども聞き耳ことなるもの

b ○ 法師のことば。

c ○ 男のことば。

d ○ 女のことば。

e □ 下衆のことばには、かならず文字あまりたり。

(4段 同じことなれども聞き耳ことなるもの)

この3文では貴族社会に生きる読者には、ジェンダーによる差違の指摘となるだろう。それは読者にも首肯されようが、eの「下衆のことば」は「聞き耳」すなわち音声の差違だけでなく、「文字あまりたり」すなわち音韻的・語彙的差違があることを指摘する。この文は、章段主題(a)を主語としない、清少納言個人の意見である。みんなが共有するジェンダー的

変異に加えて、社会階層・教養の有無による、より大きな変異を指摘するのである。これによって、「言語には社会的変異がある」という一般的命題が形成されるわけである。事実の指摘や、一般的な常識にとどまる可能性を自らの見識によって防ぐ機能をはたす。

7～10文からなるCグループも同様であるが、形容詞述語文と動詞述語文が連鎖する章段が目立つ。たとえば(9)は、章段主題「いみじう心づきなきもの（とても気に入らないもの）」に対しては、g～iの名詞述語文の連鎖によって叙述は完結する。もしもb～fの動詞述語文の連鎖がないとすると、gの外出を妨げる雨や、h従者の不満、i嫌いな人のえらそうな振る舞いであるから、「気に入らないものは自分の気分を害する他者」と集約される。

- (9) a ◎ いみじう心づきなきもの
b □ 祭、禊など、すべて男の物見るに、ただ一人乗りて見るこそあれ。
c ◇ いかなる心にかあらむ。
d □ やむごとくならずとも、若きをのこなどのゆかしがるをも、引きませよかし。
e □ 透影にただ一人ただよひて、心一つにまぼりゐたらむよ。
f □ いかばかり心せばくけにくきならむとぞおぼゆる。
g ○ 物へ行き、寺へも詣づる日の雨。
h ● 使ふ人などの、「われをばおぼさず。なにがしこそただ今の時の人」など言ふを、ほの聞きたる。
i ● 人よりはすこしくしと思ふ人の、おしはかりごとうちし、すずろなるものうらみし、わがかしこなる。

(117段 いみじう心づきなきもの)

しかし、b～fにおいて、見物の車に誰も同乗させずに、一人で見ている

男について、その狭量を理解不能と述べる。これを前もって語ることによって、g～iの文意はわかる。他者への不満というのは、それを感じる者の不寛容に由来する。一般的な現象に、気づかぬしくみが働いていることを示唆することができるわけである。具体的事例はそれ自体は多義的である。事例提示を重ねることでひとつの命題にまとまるのであるが、このように両義的な命題の正確な理解には注釈的要素が必要なのである。

Dの長いタイプの章段においては、より繊細な説明が必要なことがらを取り上げられるためにことばを重ねる。名詞述語文の連鎖も増えるが、同時に清少納言の見解をまじえる度合いが高くなる。たとえば、46文からなる「すさまじきもの」は(10)のように名詞述語文の連鎖からはじまる。

- (10) a ◎ すさまじきもの
b ○ 昼ほゆる犬。
c ○ 春の網代。
d ○ 三、四月の紅梅の衣。
e ○ 牛死にたる牛飼。
f ○ ちご亡くなりたる産屋。
g ○ 火おこさぬ炭櫃，地火炉。

(23段 すさまじきもの)

b・c・dの連鎖では、それに合う折を過ぎてしまった事例が並ぶ。これを「すさまじ」と感じるのは、ものには適した時があるからである。e・f・gの連鎖には、そのものの機能を失った事例が並ぶ。これを「すさまじ」と感じるのは、ものには期待される役割があるからである。この2つを組み合わせることによって、外的環境、内的事情のどちらに由来する場合でも、そのものの真価を発揮できないさまが、ひとをがっかりさせるのである。「すさまじ」は興がさめる事態を評価するものであるが、分類に

よって2つの共通素性を導き、さらに1つの命題に帰結する。ここでは3文を1ユニットとして、2ユニットで1命題を形成するのである。

後続部分は次の(11)であるが、 $h \cdot i \cdot k$ の名詞述語文だけに着眼すると、やはり1つのまとまりをつくる。(10)の先行文脈があるので、 h は男の子が生まれれば博士を継げるのにそうならない状態であるから、期待される真価が発揮できない。そしてこれは1つの家に関する期待外れであるが、 i は家から他所に出向く場合、 k は他所から家に来る場合の期待外れである。ものだけでなく、社会的な行為においても(10)と同様の原理が働くことを述べる。

- (11) h ● 博士のうちつづき女兒生ませたる。
 i ○ 方違へに行きたるに、あるじせぬ所。
 j △ まいて節分などは、いとすさまじ。
 k ● 人の国よりおこせたる文の物なき。
 l ■ 京のをもさこそ思ふらめ、
 m △ されど、それはゆかしき事どもをも書きあつめ、世にある事などをも聞けばいとよし。
 n △ 人のもとにわざと清げに書いてやりつる文の返事、今はもて来ぬらむかし、あやしうおそきと、待つほどに、ありつる文、立文をも結びたるをも、いときたなげに取りなし、ふくだめて、上に引きたりつる墨など消えて、「おはしまさざりけり」、もしは、「御物忌とて取り入れず」と言ひて、持て帰りたる、いとわびしくすさまじ。

(23段 すさまじきもの)

ただし、 i と k に関しては、それを期待することの妥当性について疑念が発動するところである。「自分の都合で方違えに行くのに、もてなしを期待するか?」「地方から手紙をくれたのに、お土産を期待するか?」これ

について、その疑念を解消しなければ、命題の真偽に関わる。

そのために、清少納言は、注釈的に説明をほどこす。iについては、jにおいて、節分などあらかじめ方違えがあることがわかっているときには、一層興ざめだと思う、と述べることによって、ひとが来ることがわかっていたら、それなりの対応があるのが常識であると暗示する。たしかに、「あるじ（饗応）」がないことは、思いやりがないように見えてしまう。kに対する疑念には、lにおいて京から地方に送る手紙についても同様であると、自ら反論を半ば肯定するが、mにおいて、京から地方には貴族社会の情報を送ればよいと言う。地方には同様の情報（ゆかしき事）はないから価値がある、逆に言えば、情報のない地方からは特産物が京では価値がある、と証明するのである。

形容詞述語文と動詞述語文は、このように文脈を脇道にそれないように制御する注釈的な役割を担っているのである。長い文章になると、必然的にその可能性は高くなるので、【図4】にあるように、10文を超えるとその出現頻度が高くなるのである。また、単に制御するのみならず、nのように「思いをこめて書いた手紙が届かないのは最悪である」と、手紙や方違えのような社交の根本には、相手に対する愛情があることを指摘し、論を発展する契機を与えもする。この問題提起を受けて、「すさまじきもの」章段は、この後、来客が来ない、婿が通わなくなる、婿をひとにとられる、などの事例が並ぶ。冒頭で示唆したものの真価というものが、ひとの思いで成立していることに発展するのである。

以上をまとめると、(12) のようになる。

- (12) ① 名詞述語文は連鎖によって、命題を形成する。
② 名詞述語文の連鎖を組み合わせることによって、命題の抽象度を上げる。
③ 形容詞述語文・動詞述語文は、命題の妥当性を保証する注釈的要素である。

- ④ 形容詞述語文・動詞述語文は、文脈の制御と論理の展開を担う。

短い A・B のグループはもっぱら、①のみである。文章が長くなると、①～④が順次発動する。②のように命題の抽象度が上がると、読者の命題理解に問題が生じやすい。そのために、③の補足が必要となる。そして、文脈が長くなると、論理的な線状性を構築するために、④の機能が要求されるのである。

6. 「もの」型章段の2つの名詞述語文

「もの」型章段は、名詞述語文の連鎖を定型とする。そして、その事例の指示物そのものよりも、言外の意味（コノテーション）によって、命題が形成され、論理が形成される。先述のように、名詞述語文は場と文脈によって、意味が確定するタイプの文であるから、読者が清少納言と対話的な場を形成していること⁹⁾、言外の意味が文脈を形成すること¹⁰⁾によって成立する。(12)のような文章構造をとることで、テキストに定型性を与え、一定の読み方が成立するように設計されているのである。

この構造を一貫させるために、名詞述語文の構文は定型である。(13)は、2文からなるが、章段主題 a を主語として、b, c がそれぞれ、文の述語となる。

- (13) a◎ 見ならひするもの
b○ 欠伸。
c○ ちごども。

(285段 見ならひするもの)

「もの」型章段においては、いずれの章段においても、章段主題には助詞

が付与されない。そして、名詞述語にも助詞・助動詞は付与されない。aとbは「見ていてうつるもの、あくび」と主述の関係を結ぶ。cもaを主語として「見てまねをするもの、幼児」と独立的に主述の関係を結ぶ。この名詞述語文の連鎖で、無意志的にも意志的にもひとは他者と連動する、という命題を形成するのである。「もの」型章段の名詞述語文は430あるが、416(96.7%)がこの形式である。これらは章段主題を主語とし、章段の基本構造を構成する。

名詞述語文を形成する断定の助動詞「なり」あるいは、その分離形「に・あり」型のもの、「もの」型章段では14(3.3%)にとどまる。平安和文資料では、名詞述語文としてはこちらの方が一般的であるから、「もの」型章段の構造は、一般の和文と異なる証左でもある。現代語では、「ほく、ウナギ」と言っても、「ほくは、ウナギです」と言ってもあまり内容的に差違はないが、『枕草子』においては、文構造が異なる。(14)に「なり」型名詞述語文の例をあげる。

(14) ◇ 六位の宿直姿のをかしきも紫のゆゑなり。

(84段 めでたきもの)

◇ (かたちにくさげに心あしき人。みそひめのぬりたる。)

これいみじうよろづの人のにくむなるものとて、今とどむべきにらず。

(135段 とりどころなきもの)

◇ 海はなほいとゆゆしと思ふに、まいて海士のかづきしに入るは、憂きわざなり。

(286段 うちとくまじきもの)

いずれの用例も、文中に主語(下線部)をもっており、章段主題を主語としない。これは形容詞述語文や動詞述語文と同じ性質の文として運用されている。たとえば、次の(15)はcの「御嶽精進」についてd以下の形

容詞述語文と動詞述語文が注釈的に機能する。jの「なり」型名詞述語文は、その中でiの藤原宣孝の逸話を章段に取り入れたことに対して「御嶽のついでなり」と補足している。

- (15) a ◎ あはれなるもの
b ○ 孝ある人の子。
c ● よき男の若きが、御嶽精進したる。
d △ たてへだてあてうちおこなひたる、暁の額、いみじうあはれなり。
e □ むつましき人などの、目さまして聞くらむ、思ひやる。
f △ 詣づるほどのありさま、いかならむなどつつしみおぢたるに、たひらかに詣で着きたるこそいとめでたけれ。
g △ 烏帽子のさまなどぞ、すこし人わろき。
h □ なほいみじき人と聞ゆれど、こよなくやつれてこそ詣づと知りたれ。
i □ 右衛門佐宣孝といひたる人は、「あぢきなき事なり。ただ清き衣を着て詣でむに、なでふ事かあらむ。かならずよも『あやしうて詣でよ』と御嶽さらにのたまはじ」とて、三月つごもりに、紫のいと濃き指貫、白き襖、山吹のいみじうおどろおどろしきなど着て、隆光が主殿亮なるには、青色の襖、紅の衣、摺りもどろかしたる水干といふ袴を着せて、うちつづき詣でたりけるを、帰る人も今詣づるも、めづらしうあやしき事に、「すべて昔よりこの山にかかる姿の人見えざりつ」と、あさましがりしを、四月ついたちに帰りて、六月十日のほどに、筑前守の辞せしになりたりしこそ、「げに言ひけるにたがはずも」と聞えしか。
j ◇ これはあはれなる事にはあらねど、御嶽のついでなり。
k △ 男も、女も、若く清げなるが、いと黒き衣着たるこそ、あ

はれなれ。〈以下略〉

(115 段 あはれなるもの)

命題に対する注釈的要素、あるいは文脈制御として組み込まれる名詞述語文は、文内での主述の呼応と、「なり」型の文末が選択されている。対比的に、章段主題を主語とし、「なり」をともなわない名詞述語文は、章段主題に基づく命題を生成するものとしてあらかじめ定義されているのである。

(16) a ◎ うつくしきもの

b ○ 瓜にかきたるちごの顔。

c ● 雀の子のねず鳴きするにをどり来る。〈以下略〉

(145 段 うつくしきもの)

(16) のように提示された場合、「かわいいものと言えば、瓜に描いた赤ちゃんの顔。そして、雀の子がチュンチュンと呼ぶとやってくる」ということがらそのものを共有したいわけではない。赤ちゃんがかわいいのにも関わらず、「瓜に描いてもかわいい」「動物でもかわいい」と提示することで、「うつくし」にはなんらかの象徴性や、人間の指向性があることに気づくように設計されている¹¹⁾。このタイプの文の連鎖がある場合には、言外の意味を考え、命題を構築するように仕組みられているわけである。清少納言と読者の対話の場が予定されることでそのように文意が確定し、命題の連鎖で論理的な線状性が読者に構築されるのである。

7. 「もの」型章段の文章構造

「もの」型章段は、非「なり」型の名詞述語文によって、基本構造が形成される。しかし、平安時代の和文資料において、助詞・助動詞をもちい

ない名詞述語文は『枕草子』をのぞくとほとんど見られない¹²⁾。日記や物語に現れにくい特異な文章なのである。他資料の用例は、次の(17)(18)のように人物紹介であったり、(19)のように装束の記録である。

- (17) 齋宮は水の尾の御時、文徳天皇の御女、惟喬の親王の妹。
(『伊勢物語』174段)
- (18) 次の帝、亭子の帝と申しき。これ、小松の天皇の御第三皇子。
(『大鏡』宇多天皇)
- (19) ことしの御まかなひは大納言の君。
装束、一日の日は紅、葡萄染、唐衣は赤いろ、地摺の裳。
二日、紅梅の織物、搔練は濃き、青いろの唐衣、色摺の裳。
日は唐綾の桜がさね、唐衣は蘇芳の織物。
(『紫式部日記』寛弘6年正月)

齋宮や亭子の帝、大納言の君の装束、という記録の主題があり、それについて必要な情報を箇条に書いていく様式である。名詞述語文の連鎖であることは共通するが、これらは文と文の関係が並列的で、章段主題のもとにまとまることを指向する『枕草子』とは異なる。

主題のもとに、名詞述語文の連鎖で形成される様式としては、字書がある。字書は、見出しに字形をおき、音注、義注、訓注がほどこされる。その一例を(20)に示すが、句読点をほどこし、文単位で分かち書きした。[] は、割注部分である。

- (20) 男 <字形>
『説文』云、男南反。 <出典①> <音注>
[和名、乎乃古] <訓注①>
丈夫也。 <義注①>
『公羊伝』云、丈夫、 <出典②> <義注①>

一云『万葉集』云，[万須良乎]。　〈出典③〉〈訓注②〉
大人之称也。　　〈義注②〉

（『和名類聚抄』卷2）

「男」という漢字について、音形が「男」と「南」の反切で示される。和語では「をのこ」、意味は「丈夫」、と説明することによって、この文字の定義がなされる。読者はそこから漢語についての基本イメージを形成する。そして、義注「男→丈夫→大人」、訓注「をのこ→ますらを」と複数の説明を示すことによって、共通性と多様性についてイメージの適正化をはかる。こちらは、記述同士が互いに関連性を有し、全体としてまとまりをもつ。一定の型をもつ構造化された文章である。

『枕草子』の「もの」型章段は、章段主題に対する命題を配列し、そこから、清少納言の哲学を再構築するように設計されている。「もの」型章段の名詞述語文の連鎖は、この字書のような構造的な文章をひな形とするのではないだろうか。

ただし、字書の解説は、字書ならば項目は、形、音・義・訓、と決まっている。そして、その記述は言語が一次的に指し示す内容（デノテーション）でなければならない。しかし、『枕草子』「もの」型章段は、「うつくしきもの」「すさまじきもの」といった概念についての説明であるから、直接的には語りえない。伝達手段として、その記述は、言語外的な意味（コノテーション）を指向することになる。それゆえに、文章の構造化だけではなく、清少納言と読者の間に対話の場を設定することによって、読者に命題の形成と論理の再構築を委ねるのである。その論理の根幹と、注釈的要素（アノテーション）を文型選択によって切り替えることを本稿では明らかにした。「もの」型章段は文法レベルで独自の構造を構築したテキストなのである。

8. おわりに

「もの」型章段は、命題あるいは論理を提示することを目的として、清少納言と読者の対話の場をテキストに展開する。清少納言は、その場に共有される命題を、非「なり」型の名詞述語文によって提示する。その注釈や文脈制御は、形容詞述語文と動詞述語文、そして、「なり」型名詞述語文を選択して、清少納言固有の情報として提示する。読者はこの与えられた素材をもちいて、清少納言の与えようとする命題や論理を再構築するのである。

本稿は、「もの」型章段が構造化された文章であることを指摘し、その文章形成が文タイプの選択によってなされていること、そして、それが全章段に一貫した様式であることを明らかにした。

注

- 1) この3つのグループの語彙的な差違については、富士池（2014）で調査されており、日記的章段と類聚的章段・随想的章段に顕著な差違が見られることが明らかになっている。
- 2) 川上（1966）はこれを「提示語」とし、渡辺（1981）は「共通述語」とするが、藤原（2018）で文章構造を検討した結果「章段主題」とする。
- 3) 文の切り方は、原則的に新編日本古典文学全集の句読にしたがう。ただし、次の8文は独立した文と認定した。
「京のをもさこそ思ふらめ、」（23）。「「また飲め」と言ふなるべし、」（26）。
「男女をばいはじ、」（72）。「夏、昼寝して起きたるは、よき人こそ、いますこしをかしかなれ、」（105）。「花も、」（84）。「糸も、」（84）。「いたどりはまいて、」（148）。「物見におそく出でて、事なりにけり、」（154）
なお、文中に引用される会話文は、文の構成要素と見なして、文数にはカウントしない。
- 4) 助動詞「なり」だけでなく、その分離形「に+あり」型をふくむ。活用語の連体形をうけるものも、ここにふくむ。
- 5) 「かたはらいたきもの」という章段主題がありながら、「かたはらいたし」を述語とする文を持ち込む現象については、藤原（2016）で論じた。「もの」型章段の対話的構造が顕在化しているところである。
- 6) 藤原（2018）。
- 7) 藤原（2016）。

- 8) 「もの」型章段における命題形成の方法については、藤原(2017)で論じた。
- 9) 藤原(2018)。
- 10) 藤原(2017)。
- 11) 本章段の解釈については、藤原(2008)。
- 12) 日本語歴史コーパスの検索による。

参考文献

【資料】

- 松尾聡・永井和子(1997)『新編日本古典文学全集(18) 枕草子』小学館
 片桐洋一・高橋正治・福井貞助・清水好子(1994)『新編日本古典文学全集(12) 竹取物語 伊勢物語 大和物語 平中物語』小学館
 藤岡忠美・犬養廉・中野幸一・石井文夫(1994)『新編日本古典文学全集(26) 和泉式部日記 紫式部日記 更級日記 讃岐典侍日記』小学館
 橋健二・加藤静子(1996)『新編日本古典文学全集(34) 大鏡』小学館
 京都大学文学部国語学国文学研究室(1977)『諸本集成倭名類聚抄(本文篇)』臨川書店

【データベース】

- 国立国語研究所「日本語歴史コーパス」<https://chunagon.ninjal.ac.jp/>
 国立国語研究所「日本語史研究用テキストデータベース—二十卷本和名類聚抄[古活字版]」<https://textdb01.ninjal.ac.jp/dataset/kwrs/>

【文献】

- 川上徳明(1966)「枕草子「もの」型文の構造—その成立過程を通して—」『国語学』64, 国語学会
 渡辺実(1981)『平安朝文章史』東京大学出版会
 藤原浩史(2008)「『枕草子』「うつくしきもの」の国語学的解釈」『紀要』219, 中央大学文学部
 富士池優美(2014)「枕草子の語彙—章段分類に注目して—」『国語語彙史の研究』33, 和泉書院
 藤原浩史(2014)「『枕草子』の論理形成—潜在的論理と対話的構造—」(『エネルギー』39, ドイツ語文法理論研究会
 藤原浩史(2016)「『枕草子』における章段主題の述語反復」中央大学人文科学研究所編『文法記述の諸相Ⅱ』中央大学出版部
 藤原浩史(2017)「『枕草子』の命題形成」『中央大学国文』60, 中央大学国文学会
 藤原浩史(2018)「『枕草子』の対話的な文章構造」, 高田博行・小野寺典子・青木博史編『歴史語用論の方法』ひつじ書房

『枕草子』 「もの」型章段の文章構造（藤原）

【表1】 「もの」型章段の文タイプ

章段 番号	文数	章段 主題 ◎	名詞述語文			形容詞述語文		動詞 述語文 □
			名詞 ○	名詞句 ●	なり型 ◇	形容詞 △	省略型 ▲	
4	5	1	3					1
23	46	1	9	10		13		13
24	4	1	2	1				
25	3	1	2					
26	47	1	6	10	2	19		9
27	9	1	1	5		1		1
28	6	1	3	2				
29	10	1	1	7				1
40	8	1	3	4				
43	20	1	1	9		7		2
68	5	1	1	3				
69	14	1	7	4		1		1
72	12	1	4	3		2		2
75	4	1		3				
76	4	1	3					
81	3	1	1	1				
84	33	1	9	3	2	6	3	9
85	17	1	4	5		6		1
91	11	1		2		6		2
92	9	1	1	5		2		
93	8	1	1	3		3		
94	7	1		3		3		
103	4	1	2	1				
105	13	1	1	3	2	5		1

106	4	1	1			2		
111	5	1	3			1		
112	5	1	4					
113	5	1	4					
115	18	1	3	4	1	4	1	4
117	9	1	1	2	1			4
118	8	1	4	2				1
119	6	1	4	1				
120	5	1	2					2
121	5	1	1	3				
123	7	1		2		2	1	1
133	5	1	3			1		
134	8	1	4	2				1
135	6	1	2	1	1			1
141	6	1	5					
142	5	1	4					
143	9	1	3	4				1
144	10	1		4				5
145	17	1	4	3		9		
146	7	1	1	1		3		1
147	25	1	19			5		
148	13	1	9				1	2
149	8	1	3	3		1		
151	8	1	5			2		
152	16	1	2	1		6		6
153	7	1	1	1		3		1
154	20	1	1	5		8		5
157	9	1		7				1

『枕草子』 「もの」型章段の文章構造（藤原）

158	5	1	1	3				
160	5	1	4					
161	4	1	3					
178	9	1	4		1	1		2
190	28	1		1	1	12		13
217	14	1	11			1		1
218	5	1	4					
219	18	1	17					
238	7	1	1	3		1		1
239	4	1	3					
240	5	1	4					
241	9	1	4	1		2		1
242	4	1	3					
243	3	1	1	1				
245	4	1	3					
246	5	1	1	1		1		1
247	3	1		2				
258	28	1	1	8		16		2
276	11	1	6	3			1	
285	3	1	2					
286	32	1	3	1	3	7		17
一本1	8	1	5	2				
一本2	5	1	2			1		1
一本3	6	1	3	1				1
一本4	8	1	7					
一本5	6	1	5					
計	797	78	256	160	14	163	7	119